

『母親!』 ルイ・ジュヌヴィ&エヴァ・マルゴリー 著 (朝日新聞社)

『父子家庭を生きる―男と親の間―』 春日キスヨ 著 (勁草書房)

『近代家族とフェミニズム』 落合恵美子 著 (勁草書房)

江原由美子

子どもたちが一人ひとり違うように、子どもたちの家族も親も皆違う。そして親の生きている状況も皆それぞれ異なるのである。「親ならばこうであるべきだ」「家族ならばこうするべきだ」という見方ではなく、親や家族の多様なありかたを教えてくれる本を、三冊紹介しよう。

『母親!』

アメリカの母親たちへのアンケート調査をもとに、女性たちが、自分の子どもについて、自分が母親で

あるということについて、本当はどう感じているのか」を明らかにした本。アンケート調査にもかかわらず、この本には「母親たちの生の声」が実に率直に語られており、母親たちの生き方や悩みが脈々と伝わってくる。読んでいるとこんなにも異なった感じ方があるのかと感心するし、同じ「母親という役割」でも持った子どもの個性や母親の生きなければならぬ環境によってまったくその役割の難しさが違うということが、良く分かる。特に、母親たちがそれぞれの子どもにぶつかってその「個性」ゆえに戸惑ったりどう扱え

ば良いのか悩んだりしている様子がありのままに語られており、母親でも子どもが全て分かるわけではないこと、親子といえどもやはり「人間関係」なのであって「相性が良い」場合ばかりではないことなど、普通母親が他人には言いにくいような内容にまで及んでいる。母親たちはありのままの人間として、自分の母親としての限界や欠点を知りつつ、それでも「母親だから」精一杯努力しようとしているのである。しかし、こうした女性たちの感じている「母親という重い責任」とそれに伴う努力を理解しようとする男性たちが多い。この本の中では、女性たちがこうした夫たちに対してどんな怒りを感じているかも率直に書かれている。その他、障害のある子ども・問題がある子どもを持った場合の母親たちの感情的動揺・生活上の苦勞・生き甲斐や満足感、働く母親の罪悪感や満足感、シングルで子どもを育てている母親たちの重い責任感など、多様な状況の中で生きている母親たちの声も沢山載っている。一つ一つの女性たちの声が心に響くとと

もに、これほど多様な沢山の声を聞くことで、「今の母親は〜だ」「母親ならば〜であるべきだ」等の社会常識など、ふっとんでしまう。その意味で母親に対する社会通念から離れてみるためには格好の一冊である。厚い本であるが、母親の手記を集めたような内容なので、一気に読めるだろう。

『父子家庭を生きる―男と親の間―』

広島市における父子家庭男性たちの集いをもとに、現代の日本で父子家庭の親をすることの悩みや苦しみを明らかにした本。母親であることと自分の生き方との矛盾、家庭と仕事の両立の困難さという女性の問題に関しては、随分理解がされてきたけれども、母親がいけないという状況の中で父親が子育てと経済的支え手という役割を両方引き受けなければならなくなった時、どんな問題が生じるのかについては、ほとんど理解されていない。それどころか、「女親こそ親である」という通念が支配している社会の中で、「男親だ

からうだ」という偏見にさらされたり奇異の目で見られたりすることで、さらに困難な状況に陥らされている。本書の中で、父子家庭の男性たちは、「世間の目」「近所の目」「親類の目」「同僚の男性の目」「職場の目」を気にせずにはいられない生活、それなのに理解されず孤立させられてしまう生活を述べている。衝撃的なのは、父子家庭の男性たちは経済的な困難にもさらされていることである。現在の職場で、子育てと両立できる条件の職場は少ない。残業や休日出勤なしで働こうとすると、男性でも非常に給料が減ってしまう。その上、保育料も増えがちな家庭の出費も家計を圧迫する。これらの男性たちは、家庭と仕事の両立に苦しむ女性や、母子家庭の親である女性と同じ苦勞を抱えている。この本を読むと、働く母親たちの困難とは、女性であるから生じるといっても、子育て責任と職業生活が両立しない現在の労働条件のゆえに生じてくる問題であることが良く分かる。しかし父子家庭の男性に特徴的なことは、その苦境を訴えたり相談で

きる機関や人が余りにも少ないことである。いやそれ以前に「男の面子」から、相談することすらできないことも多い。男性も子育て責任を持つのが当たり前なのに、現在の社会では一人でその責任を背負っている男性に、揶揄やからかいの視線を投げかける。だから男性たちは「男の面子」にかけても相談などすまいと考えるのだ。男性が親として生きることが現在こんなにも難しいことなのである。

『近代家族とフェミニズム』

前の二つの本が、現実の生の声から親であることや家族であることを問い掛けてくるのに対して、この本は歴史的な観点から現在の親子関係や家族関係を見直させてくれる論文集である。特に、巻頭の「〈近代家族〉の誕生と終焉」は、「母子や家族の親密な感情」という我々が自明視している家族観が、〈近代家族〉において始めて成立したものに過ぎずせいぜい二〇〇年の歴史しかないことを主張し、発表当初からかなり

の反響を呼んだ論文。「母性」や「子ども」についての我々の社会通念を、大きな観点から見直してみたい人にはうってつけの本である。本書には、先に挙げた論文の他、「出産の社会史」や「近代家族における子

どもの位置」などの社会史関連の論文、現代家族に関する論文、フェミニズム関連の論文なども収録されており、多様な読み方ができる。

(お茶の水女子大学)

『倉橋惣三「保育法」講義録』 土屋とく 編 (フレーベル館)

『新幼稚園参考書』 東京都私立幼稚園協会 編・著 (フレーベル館)

『のぼらの村のものがたり』 ジル・バークレム 作 (講談社)

村石 京

『倉橋惣三「保育法」講義録』

「幼児の教育」誌を継続して読んでおられる方なら、このタイトルを見て「この間『幼児の教育』で読んだわ」とおっしゃるでしょう。その通りなのです。

一九八九年一月から同年五月号迄の『幼児の教育』に

掲載されていて、私もその時読みました。それがこの度一冊の本としてまとめられて、フレーベル館から発刊されました。

この「保育法」講義録とは、私どもの附属幼稚園の大先輩である菊池フジノ先生が、まだお若い頃(昭和